

# 大学生の病気の子どもに対する ボランティア参加意欲に関連する要因の検討

— 病気の知識や経験, 病気や病気の子どものイメージ —

○岩野麗歌・金平希

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学人間文化学部心理学科)

## 本研究の目的

病気の子どもは将来や治療, 対人関係, 学習に不安がある。その際, 支援者として時間に比較的余裕のある大学生に注目が集まっている。しかし, 大学生を対象とした研究はない。そこで本研究では, 大学生の病気の子どもに対するボランティア参加意欲に影響を及ぼす要因を検討することを目的とした。

## 方法

**調査対象者および調査期間** クラウドソーシングサービス (Yahoo! Japan) に登録している大学生119名を対象とした。対象者の内訳は, 男性67名, 女性50名, その他の性2名 (平均年齢21.2歳,  $SD=2.69$ ) であった。2022年10月に調査を実施した。

**調査内容** 加瀬・竹鼻 (2019) を基に, ①フェイスシート (性別, 年齢, 学年, 学部, 罹患経験の有無, 病気の家族の有無, 病気の知人の有無), ②病気に関する知識 10項目, ③病気に関する経験 9項目, 経験による影響 1項目, ④病気に対する否定的認知尺度 10項目 (悲観的感情 6項目, 病気による支障や制限 4項目), ⑤病気の子どもに対する認知尺度 23項目 (肯定的な側面; 精神的成長 5項目, 周囲へ与えるプラスの影響 5項目, 否定的な側面; 社会性と自立性の発達に対する支障 5項目, 病気により抱く消極的印象 5項目, 病気による学校生活の支障 3項目), ⑥ボランティア知識・経験の有無, 参加意欲 (0~10段階) について調査した。

## 結果

まず, 病気に対する否定的認知尺度や病気の子どもに対する認知尺度について, 確認的因子分析を行った。その結果, 病気に対する否定的認知尺度は, 1因子に集約され, 「病気に対する否定的認知」と命名した ( $\alpha = .91$ )。また, 病気の子どもに対する認知尺度においても, 肯定的認知および否定的認知いずれも 1因子に集約され, 「病気の子どもに対する肯定的認知」 ( $\alpha = .88$ ), 「病気の子どもに対する否定的認知」 ( $\alpha = .89$ ) と命名した。

次に, 病気の子どもに対する大学生のボランティア参加意欲における影響要因を検討するため, 目的変数をボランティア参加意欲とし, 説明変数を病気に対する否定的認知, 病気の子どもに対する肯定的認知, 病気の子どもに対する

否定的認知, 病気に関する知識得点, 病気に関する経験得点, 経験による影響, 性別, 罹患経験の有無, 病気の家族の有無, 病気の知人の有無, ボランティア知識の有無, ボランティア経験の有無とする重回帰分析を行った。その結果, 病気の子どもに対する肯定的認知と病気に関する知識得点, ボランティア経験の有無はボランティア参加意欲を有意に予測していた ( $R^2 = .24$ ; 病気の子どもに対する肯定的認知:  $b = 0.12, SE = 0.06, \beta = .23, t(104) = 2.03, p = .045$ ; 病気に関する知識得点:  $b = 0.33, SE = 0.18, \beta = .17, t(104) = 1.82, p = .071$ ; ボランティア経験の有無:  $b = 1.54, SE = 0.76, \beta = .21, t(104) = 2.02, p = .046$ )。

## 考察と展望

本研究の結果から, ボランティア参加意欲には, 病気の子どもに対する肯定的認知と病気に関する知識, ボランティア経験の有無がそれぞれ影響を及ぼしていた。この背景には, 病気の子どもを包摂する共生社会への意識が関係していると考えられる。例えば, 加瀬・竹鼻 (2019) は, 学級担任を対象として, 病気の子どもに対する肯定的な認知の高さが支援行動を促進する背景には, 病気の子どもを包摂するインクルーシブな教育づくりの観点があると報告している。また, 生川 (1995) は, 精神遅滞に関する知識の有る者は共生社会に関心があると考えられるため, 実践的な好意度が高く, 統合教育に同意し, 精神遅滞者と健常者との交流を推進する思いが強いことを明らかにしている。一方, ボランティア経験が豊富な者は, 自ら進んで他者への援助行動を行っており, もともと援助規範意識が高いと思われる。そのため, 以前に何らかのボランティアを経験した者は, 病気の子どもに関するボランティアにも参加意欲が高いのではないかとと思われる。このことから, 本研究対象の大学生であっても, 病気の子どもに対して肯定的な認知を持っている者や病気に関する正しい知識を有している者, ボランティア経験のある者は, 病気を有する子どもを排除せず, 共に生きるといった認識や援助規範意識が高く, それにより病気の子どもに対するボランティア活動に参加したいという意欲が高まった可能性がある。

今後は, ボランティア参加意欲の影響要因で特に変化可能性が期待できる知識に焦点を当て, 病気の子どもに関する知識教育と援助行動との関係の検討が必要だろう。